幼稚園の源流を求める旅

森有礼の第二次在米時代(3)

森有礼の第二次在米時代とアメリカの幼稚園

国吉　栄

森有礼駐米時代の幼稚園

森有礼が日本初の駐箚(ちゅうさつ)外交官として在米したのは、まだ草創期にあったアメリカの幼稚園が全米への展開に向けて大きく胎動を始めた、アメリカ幼稚園史にとって特別な時代であった。

当初はドイツ人入植地の中に開かれたドイツ人の子どものためのドイツ語の幼稚園が主流であったが、英語を話す人々の間にも認知され始めていた。

政府刊行物も盛んに幼稚園を紹介していた。一八七〇年の内務省教育局年報にはエリザベス・ピーボディーのKindergarten Cultureが、翌年の年報には、教育局長イートンの助手ジョン・クラウスとピーボディーの二編の幼稚園紹介文が収録された。ピーボディーがワシントンに招かれて働いた成果は冊子*The Kindergarten*として実を結び、一八七二年七月に教育局から出版されて、各方面に大量に配布された。一八七三年の年報には全米の幼稚園を網羅した最初の統計が発表された。

公立幼稚園設立の動きも起きていた。ピーボディーの精力的な働きかけによって、セントルイスの教育長ウィリアム・ハリスが、同市の教育委員会に幼稚園を学校教育の一部に導入するよう勧告していた。ボストンでは実験的に公立小学校に幼稚園が付設されもした。

日本の幼稚園史研究にとって注目すべきは、こうした動きが、日本とは関係のない海の向こうの外的状況としてあったのではない、ということである。森はしばしば教育局にイートンを訪ねて、親しく情報交換した。教育局年報には、森からの提供と明記して日本の教育資料が掲載された。森もイートンから教育局の各種出版物を受け取った。従来の日本幼稚園史研究では報告されていないが、前述の、ピーボディーのKindergarten Cultureが掲載された一八七〇年の年報と、ピーボディー監修の*The Kindergarten*は、わが国の国立公文書館に所蔵されている。前者には文部省宛の森のサインがある。ごく早い時期にわが国に入った幼稚園文献である。

しかも森は、文献を通してのみ幼稚園についての知識を得ていたのではない。日ごろ教育に対する強い関心を表明していた森に、イートンが、彼の依頼により教育局で仕事中のピーボディーを紹介しなかったとは考えられないからである。なにしろ彼女は教育局が広報に力を入れている幼稚園運動の中心人物であり、「マサチューセッツ州議事堂の正面にダニエル・ウエブスターと並んで像が建てられているほどの著名な教育者」ホーレス・マンの義姉なのである。イートンは森が紹介した一介の学生に同道して上院議員に会いに行ってくれたり、マン夫人への紹介状を書いてくれたりする人物でもある。森は駐米時代に三つの重要な著作を発表するが、そのどれにもホーレス・マンを高く評価する言葉や、マンの著作からの引用がある。それらもこうした具体的な人的交流と無関係ではあるまい。

ボストン滞在中のある日、私はピーボディーが晩年を過ごしたコンコードを訪ねた。美しいスリーピー・ホローの丘に彼女の墓があり、エマーソンやオルコットなど彼女の親しい友人たちもそばに眠る。墓苑近くにある

公共図書館は、その昔はエマーソンやピーボディーらが寄贈した書籍が蔵書の中核であったという。その特別資料室で思いがけずいただいた論文の抜き刷りに、私は大変驚かされた。ピーボディーがWest Streetの本屋で取り扱った外国書籍の輸入業務を託されていたのが、彼女のいとこGeorge Palmer Putnamだというのである。

私は以前、その息子が亡き父をしのんで著した*George Palmer Putnam 1814-1872*という本を読んだことがあった。著者は、書籍の取次会社を経営していた父親と森有礼との交友を懐かしそうに記していた。森が自身の重要な著作*Religious Freedom in Japan*（日本における信教の自由）を発表前に父に見せにきたことも記されていた。父が突然の事故で亡くなった際に届いた森の手紙も収められていた。その人がピーボディーのいとこだったとは。

帰国後、私はすぐにその本を読み直した。何と軽率なことであろう。私は同書の日本に関する部分を拾い読みしていたに過ぎず、同書にはエリザベス・ピーボディーの思い出も書かれていたのである。

日本幼稚園史研究の課題

日本の幼稚園はどこから来たのか、という問いに答えるために考えなければならないことは何か。

幼稚園の導入に関する研究は決して少なくないが、研究者の関心はウィーン万博を代表とする海外博覧会における情報収集と岩倉使節団の体験とにほぼ絞られ、幼稚園運動の当事者である人々と同時代の空気を吸い、彼らと親しく交流していた人間の存在を、ほとんど見過ごしてきてしまったのである。

幼稚園史は注目してこなかったが、森と幼稚園との関係については、実は早い時期に言及されていた。彼は明治二十二年、大日本帝国憲法発布の日の朝、暴漢に襲われ命を落としたが、それから十年後に出版された木村匡『森先生伝』（大空社）には次のように記されている。

先生甚学を好む（略）其本領とする所の教育に関しては最精神を傾注し、苟くも閑あればコネクチカット州、マサチューセッツ州の学校を巡視し、或は学者に

就き、其説を叩くを常とせり。幼稚園のことの如きは、当時の米国に於てすら未だ人心を感ぜしめざるに、先生率先して之を研究せり（同書62～63頁）。

木村は森が文部大臣であった時の秘書官である。同書は国体主義者という森の虚像が形成される遠因となった悪書とも評されているが、直接森から聞いたものであろうか、事実関係の記述については、その多くがのちの研究によって裏付けられている。

私は幼稚園史に興味を抱く者として、この記述に非常な関心を寄せざるを得なかった。「幼稚園のことの如きは、当時の米国に於てすら未だ人心を感ぜしめざるに」など、事情を知らなくてはとても書けるものではない。しかし教育史研究においても、木村が明確に記した森と幼稚園とのかかわりについては、直接的な関心が向けられることはなかったのである。

森有礼研究に新たな地平を開かれた林竹二氏は、かつて、今後の森有礼研究は、「二度目のアメリカでの彼の経験したものと、彼の編著の立ち入った吟味が必要である」（『林竹二著作集2』197頁）と述べられた。その後多くの研究が発表されたが、「二度目のアメリカ」、すなわち外交官として赴任した彼の第二次在米時代そのものを取り上げ、新たな資料を発掘し、そこから彼の経験を明らかにしようと試みた研究はわずかであった。

森の活動分野は政治・外交・文化・教育全般と広範にわたるため、研究者の関心が幼稚園というマイナーな分野に向けられなかったのはやむを得ないかもしれない。しかし、森の第二次在米時代は日本幼稚園史にとっては決定的な時代である。木村のあの記述を本当に証明する仕事はまだ残されているのであり、それは幼稚園史研究者こそ担うべき仕事ではないか。そうすることによって、新たな幼稚園史を書き起こすことが可能になるばかりでなく、森有礼研究にも資することができるのではないか、と思うのである。

日本幼稚園史研究には、在米時代の森有礼の経験を明らかにするという重要な課題が残されている。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）